はじめに

子どもの病気の予防から診断，治療には，小児科医だけではなくさまざまな診療科の専門医と連携して当たる必要があります．全身を診ることができる小児科医が小児医療の窓口となることで，必要なときにしかるべき専門医に相談するというしくみができてきました．病院の小児医療では，小児科医と小児外科医・小児集中治療医・脳神経外科医・整形外科医・形成外科医・心臓血管外科医・眼科医・耳鼻科医などの多くの診療科との連携があって，初めて質の高い医療を提供することができます．また，最近は遺伝的素因に関わる疾患を診る専門医も必要とされています．今回の版ではこれらの点を意識して，小児内科系のみならず，小児診療に関わる各診療科の項を充実させました．また，最近の小児医療で取り組みが注目されている「医療的ケア児」「移行期医療」についても取り上げました．

小児医療に関わる看護師の仕事は多岐にわたります．問診や処置の際の医師の補助業務は看護師の役割ですが，相手が子どもの場合，スムーズに処置が進まないことも少なくありません．そのような際には子どもの気持ちを落ち着かせるためのサポートも看護師が行います．子どものケアは医療行為にとどまらず，身の回りの世話や安心して治療を受けられるようにするプレパレーションもその一環です．看護師は子どものそばにいることで安心感を与え，治療を一緒に乗り越えていきます．

小児医療では子どもとその家族，双方へのケアが必要です．家族が抱える不安や悩みを読み取って精神的なサポートを行うことや，子どもに必要なケアができるように知識や技術を伝えることは特に重要です．病状によっては家族が神経質になっている場合も少なくありません．親が不安な気持ちを抱えていると子どもも不安を感じてしまうため，家族がきちんと子どもの病状を理解し，受け入れることができるようサポートすることも看護師の役割となります．近年の小児医療では「ファミリーセンタードケア(family centered care)」という言葉がよく使われています．私は「家族と一緒に築くケア」と紹介していますが，今後日本の小児看護の大切な理念となっていくと思います．今回の改訂版では，事例を通して子どもと家族に必要とされるケアを解説し，より実践に役立つ内容となりました．

本書は，主に開設30年を迎えた長野県立子ども病院のスタッフが，その経験と知識を科学的な検証のもとにわかりやすくまとめています．学生だけでなく，現在小児臨床の現場に携わっているスタッフの皆さんにとっても，「病気の子どもとその家族」に総合的ケアを行う上で本書が役立つことを期待しています．

編者を代表して　中村 友彦